

随筆文学の系譜……『方丈記』の影響力

*1) 島内裕子

要旨

本稿は、室町時代と江戸時代に書かれた住まいに関する随筆の中から、肖柏と大田南畝の作品を中心に取り上げ、『方丈記』がそれらの作品に、どのような影響を与えたかを考察するものである。人は住まいに何を託し、どのような理想や願望を表現してきたのか。そして、それらの作品は文学史の中に、個別に点在するだけでなく、時代の流れを貫いて、どのような系譜をかたち作ってきたのか考えてみたい。それらの系譜を辿ることによって、『方丈記』に代表されるような、文学作品に見る住まいの理想像が、人間の生き方と密接に結びついていることが明らかになるとともに、『方丈記』が内包している多様な文学世界の広がりも明らかになるであろう。

はじめに

文学作品の中に住まいのありさまが描かれることは多いが、本稿では、自分自身の住まいのことを書いた作品を中心に取り上げて、住まいというものが、どのように描かれているかを考察する。ひとくちに住まいを描いた文学と言っても、自分の住まいや身近な人の住まい、あるいは全くの想像上の住まいなど、数多くのものがある。

そこで本稿では、取り上げる作品を限定することによって、住まいの文学の系譜が浮かび上がるようにしたい。このような方法は、考察対象の幅を狭めることになるが、一方ではまた、このような方法によってこそ、くっきりとした一筋の系譜を浮かき上がらせることが可能となる。ここで住まいの文学として取り上げるのは、主として自分自身が住む草庵や小住宅、あるいは書齋を描いた短い作品であり、これらを仮に「住居記」と呼び、物語に描かれた住まいの考察は、除外した。このような限定を施してもなお、「住居記」は非常に多数あ

*1) 放送大学助教授（人間の探究）

るが、ここでは、『方丈記』を中心軸に据えて、『方丈記』のさまざまな形態を、諸本を概観することによって捉え、次の中から特に略本系『方丈記』の性格を検討する。次いで、この略本系『方丈記』を书写したことも知られる連歌師肖柏の「住居記」を取り上げて、それが『方丈記』のどの系統の本と関連するかを見届ける。さらに、近世の「住居記」の中から大田南畝の作品を取り上げて、平安時代以来の住まい文学が、どのように展開したかを考察したい。

一 広本系『方丈記』と略本系『方丈記』

住まいの文学を考えるにあたって、まず第一に思い浮かぶ作品は『方丈記』である。『方丈記』の諸本は広本系と略本系に大別され、広本系は大福光寺本に代表されるような古本系統と一条兼良によって書写された本に代表される流布本系統に分けられる。また、略本系は、長享本・延徳本・貞字本に大別される。『方丈記』の諸本の検討においては、広本系と略本系のそれぞれの成立事情や、この二系統がどのような関係にあるのか、が究明される必要があるが、広本系から略本系になったのか、あるいはその逆なのか、また、広本系も略本系も、すべて鴨長明自身による推敲や改変から生じたもののかなど、その真実はなかなか極めがたい。

本稿においては、『方丈記』諸本の成立時期の前後関係や、系統が発生した経緯などについて、独自の立論の準備は持ち合わせていないのであるが、後世の文学作品に対する『方丈記』の影響力を考える際に、どの系統の本が、どのような作品群に影響を与えたか、という観点に立脚するならば、『方丈記』の諸本それぞれの文学的な価値や作品としての達成度などを照射する一助ともなるのではないだろうか。なお、本稿で諸本間の差異を問題としない場合には、『方丈記』という呼称を使用する。諸本それぞれの内容の差異に着目する場合は、広本系・流布本系・略本系などの呼称を付けて区別する。

最初に、広本系と略本系の『方丈記』の内容について、簡単に概観しておきたい。広本系と略本系の『方丈記』は、まず第一に「五大災厄」の記述の有無によって大別されている。「五大災厄」の記事を有し、全体の分量も多くなっている広本系と比べて、略本系は、「五大災厄」の記事を欠いているため、分量も少ない。

第二に、広本系には、十世紀の文人である慶滋保胤の『池亭記』との強い関連性が指摘されている。『池亭記』が都の西と東の住居や町並みの特徴を書き、みずからの理想の住まいを獲得するにいたるまでの自分の住まいについて触れているように、広本系『方丈記』もまた、都の住まいのようすや、方丈の庵に住まうまでの住居と精神の遍歴を記している。それに対し

て、略本系は、理想の住まいにいたるまでの遍歴については詳しく記さない。

つまり、略本系の『方丈記』は、すでに手に入れた理想の住まいのありさまを描くことに主眼があると考えられる。略本系と広本系を読み比べると、略本系は簡略過ぎて文学作品としては物足りないようにも感じられるが、このような略本系の書き方は、後述するように、後世の「住居記」に受け継がれてゆき、短い記述の中に住まいのたたずまいを描く数多くの作品を生み出している。

この点に注目すれば、『方丈記』は、『池亭記』の記述方法を受け継いだ広本系『方丈記』と、住まい自体の記述が中心となっている略本系『方丈記』という、二つの系統があること自体が重要なのであり、後世に与えた『方丈記』の影響力を、作品の系譜を辿ることによって測定するという視点が有効であるように思われる。『方丈記』の諸本それぞれとの関連性を視野に収めることによって、平安時代から江戸時代、ひいては近代にいたるまでの住まいの文学の系譜を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。

そこで、広本系と略本系の『方丈記』を比較するために、『池亭記』の表現との類似箇所の有無という視点から考えてみよう。なお、ここでは、『池亭記』との類似箇所がどのあたりが引用されているかに注目したので、『池亭記』の記述の順

に従って、特に表現が類似している箇所を挙げ、『池亭記』は(池)、比較する対象は広本系の大福光寺本を(広)として、並記する。^①

① (池) 予、二十余年ヨリ以来、東西二京ヲ歴見ルニ…、

(広) 予、モノノ心ヲ知レリシヨリ、四十アマリノ春秋ヲ送レルアヒダニ、世ノ不思議ヲ見ル事、ヤ、タビタビニナリス。

これは、自分の体験を回想する部分の書き出しである。『池亭記』で保胤は、二十年來の都のありさまを見て、自分の体験に照らし合わせて当時の社会を批判する。この記述があつてこそ、理想の住まいを手に入れたことの貴重さや満足感が倍加するのである。『方丈記』も同様の書き方になっている。

② (池) 東隣ニ火災有レバ西隣ハ余炎ヲ免レズ。南宅ニ盜賊有レバ、北宅ハ流矢ヲ避リ難シ。南院ハ貧シク北院ハ富メリ。富メル者未ダ必ズシモ徳有ラズ、貧シキ者亦猶恥有リ。又、勢家ニ近ヅイテ微身ヲ容ル、者ハ、屋破レタリト雖モ葺クコトヲ得ズ、垣壞レタリト雖モ築クコトヲ得ズ。樂シビ有レドモ大キニ口ヲ開キテ咲フコト能ハズ、哀シビ有レドモ高ク声ヲ揚ゲテ哭スルコト

能ハズ。進退懼有リ、心神安カラズ。譬ヘバ鳥雀ノ鷹
鷲ニ近ヅクガ猶シ。

(広)

若己レガ身数ナラズシテ、権門ノカタハラニ居ルモノ

ハ、深ク悦ブ事アレドモ、大キニ楽シムニアタハズ。

歎キ切ナルトキモ、声ヲアゲテ哭クコトナシ。進退ヤ

スカラズ、起居ニツケテ恐レヲノ、クサマ、タトヘ

バ、雀ノ鷹ノ巢ニ近ヅケルガゴトシ。若貧シクシテ、

富メル家ノトナリニ居ルモノハ、朝夕スポキ姿ヲ恥ヂ

テ、ヘツラヒツ、出デ入ル。妻子・僮僕ノ羨メルサマ

ヲ見ルニモ、福家ノ人ノナイガシロナル気色ヲ聞クニ

モ、心念々ニ動キテ、時トシテヤスカラズ。若狭キ

地ニ居レバ、近ク炎上アル時、ソノ災ヲ遁ル、事ナ

シ。若辺地ニアレバ、往反ワツラヒ多ク、盜賊ノ難ハ

ナハダシ。又、勢ヒアル物ハ貪欲深ク、独身ナル物ハ

人ニ輕メラル。財アレバ恐レ多ク、貧シケレバ恨ミ切

也。

どちららも、周囲の環境に左右されて、自分の暮らしがおびやかされることを描いている。特に傍線部の表現の類似によって、広本系『方丈記』と『池亭記』との強い関連が窺われる。

③(池) 予、行年漸ク五旬ニ垂トシテ適少宅有リ。(中略)亦

猶行人ノ旅宿ヲ造リ、老蚕ノ独繭ヲ成スガゴトシ。

(広)

コ、ニ、六十ノ露消エガタニ及ビテ、更ニ末葉ノヤド

リヲ結ベル事アリ。イハ、旅人ノ一夜ノ宿ヲツク

リ、老タル蚕ノ繭ヲイトナムガゴトシ。

こども、表現が酷似している。

『池亭記』の表現と広本系『方丈記』の表現が明らかに類似している箇所を三箇所掲げてみたが、これ以外にも類似箇所がいくつか見られる。一方、略本系『方丈記』には、今挙げたような『池亭記』との類似は、見えないのである。このことは何を意味しているのだろうか。

上記の類似箇所は、自分が実見した都のありさまや、世の中の生き難さや、自分が辿り着いた住まいのことが印象づけられている箇所である。このような記述があることによって、自分の住まいは、自分に相応な理想的なものであることを浮き立たせていると同時に、広本系『方丈記』の作品としてのトーンは、社会や他人に対する批判性の強いものになっている。

そのことは、広本系の末尾には、庵での自足した生活自体への強烈的反省という、究極の自己への批判が書かれていることも深く繋がっているのではないだろうか。逆に言えば、もし広本系『方丈記』が、『池亭記』の表現を全く使わずに書かれていたならば、記述内容の基底部に批判精神がこれほどまでに

あらわれ、最末尾で、庵での生活自体を否定するような強い批判が噴出したのだろうか、ということである。つまり、広本系の最末尾における自己批判は、たまたま出てきた感慨なのではなく、『池亭記』の表現を使って執筆してきたことが底流にあったのではないのか、ということである。このことは、略本系と比較することによってさらに明確になってくるように思われる。

略本系『方丈記』には自分が体験した「五大災厄」の記述もなければ、最後の自己批判もない。このことは略本系『方丈記』が、作品として広がりや深みを欠くというマイナス面をもたらした反面で、自分の住居への満足感や、そこでの生活のすばらしさを肯定的に捉える文学であることを示しているのである。略本系『方丈記』のように、住まいの描写とそこでの暮らしの満足感に力点を置く書き方は、室町時代や江戸時代における短編の「住居記」の記述パターンになっていると言ってもよいほどである。

なお、住まい自体の記述に重点を置く略本系『方丈記』の先蹤を平安時代の文学に求めるとすれば、『池亭記』よりもむしろ、菅原道真の『書齋記』に近いと思われる。

二 延徳本『方丈記』と肖柏の「住居記」

『方丈記』諸本における略本系の性格に着目したところで、次に略本系の中から特に延徳本『方丈記』を軸として、他の住まいに関する後世の作品を比較検討したい。「延徳本」は、その奥書に肖柏の名が見え、肖柏にも『夢庵記』というみずからの草庵のありさまを綴った短い随筆や、さらに『三愛記』というみずからの好尚や日常を綴った随筆がある。ここでは、「延徳本」の構成を再確認しながら、記述の特徴を見てゆきたい。

まず、延徳本の構成を考えるにあたって、段落構成をどのように理解したらよいだろうか。大曾根章介・久保田淳編『鴨長明全集』（貴重本刊行会・平成十二年）では、その「凡例」において、「改行・改面は底本の状態にかかわらず、担当者の判断によるものとするが、（15オ）（26ウ）などの形式で、改面を示す」とあるが、本書に収録されている延徳本は、全文が改行なしで翻刻されている。梁瀬一雄訳注『方丈記』（角川文庫・昭和四十二年）所収の延徳本は、十四段落であり、佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記・徒然草』（岩波書店・新日本古典文学大系）所収の延徳本は、六段落となっている。ここでは、内容の展開を大きく把握している新大系本の六段落構成によって、「延徳本」を概観してみよう。

第一段落は、「行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず」という書き出しから「かやうに歎きつゝ一生はつるといへども、希望は尽きず」まで。この第一段落は、内容としてはさらに二つの部分に分けられる。すなわち、人とすみかを川の流れやうたかたに喩え、続けて人とすみかのそれぞれのほかなさを述べる部分が前半である。なお、広本系『方丈記』では、この直後から「五大災厄」の記述が入るが、略本系には、その部分は書かれていない。第一段落の後半は、「若き子をさきだて、袖をしぼる老人もあり」から始まる部分で、ここでは、子に先立たれた親や孤児の悲しみ、あるいはまた貧者と富者のそれぞれの苦勞など、世の中のさまざまな苦しみを書く。

第二段落は、「つらつらこれらのことをおもふに、家あれば焼失の恐れあり」から、「たゞ一の息とまり、二のまなこ閉づるを待つばかり也」まで、家・妻子・眷属・宝・田畠などがあることによる苦しみを書く。

第三段落は、「爰にわれ、深き谷のほとり閑なる林の間に、僅なる方丈の草の庵を結べり」から、「たとひ是より広しとも、誰をか宿し、何ものをか置かむ」までである。ここには、方丈の庵の外観と内部の様子が具体的に描かれ、輿に乗ると琴や琵琶を弾くとある。また、この庵が移動可能なものであり、家財は車一両に載せられるほど小さいものであるとも書かれている。この段落に描かれている庵の構造は、広本系の庵と多少違

いがあることが従来も注目されてきた。この点について、細谷直樹は次のように述べている。

広本と略本との間の庵室の構造の相違は、日野山中での庵室の模様がえとみた方がよくはなからうか。その相違が何に起因するのかは今の段階では確かなことはわからない。しかし、その相違からして、広本略本ともに長明の筆になることだけは疑えぬであろう。⁽²⁾

また手崎政男は、『方丈記』の略本・流布本・古本を相互に比較対照するという方法を取って、方丈庵の実態とその推移の跡とを考察し⁽³⁾た上で、「これら三者の間における記述は、それぞれの時点における方丈庵の実態を示すものとすることができ、かつ、そのように解することによって、三者の本文は相互に矛盾なく受け取ることが可能であることを明らかにし得たと思うのである」と述べている。⁽³⁾

本稿では、『方丈記』諸本間の庵の描写の差異について比較検討することはしないが、庵の構造に関して、広本系と略本系の違いで特に注目したいのは、略本系の「竹の柱をたて」という部分の存在である。この表現は、略本系の長享本・延徳本・真字本すべてに共通して存在しているが、広本系にはない。ところが、一方で広本系の大福光寺本では、長明がみずからの住

まいの遍歴を記す箇所が方丈の庵の描写の前にあり、その住居遍歴の中で、三十代に住んだ庵の描写に、「竹ヲ柱トシテ、車ヲ宿セリ」とある。この箇所について、新大系の脚注には、『宗長百番連歌合』の、「仮の世とおもひとるこそあはれなれ／竹を柱に柴ふける庵」が引用されている。しかし、大福光寺本のこの部分は、あくまでも車宿りとしての竹の柱であり、脚注の例句は、竹を柱として建てた庵のことを詠んでいるのであるから、この付合は、むしろ略本系の庵の描写に「竹の柱をたて、荳菴をふき」とある部分にこそ合致する例となる。宗長と言えば、後述する肖柏とともに宗祇の弟子であり、宗祇・肖柏・宗長の三人による『水無瀬三吟』『湯山三吟』は著名である。なお、右の箇所は、広本系の兼良本でも、「竹をはしらとして、車やどりとせり」とある。

さて、第四段落は、「沢の根芹、峰の木の実、あるにつけて命をつなぎ、麻の衣、藤のふすま、うるにしたがひて肌を隠す」から、「心ざす道深ければ、つれづれたる愁もなし」まで、方丈の庵での一人暮らしの気安さを述べる。

第五段落は、「谷の清水、峰の木立、眼を喜ばしむる友なり」から、「但みづから慚愧の心を起し、信教の思あらんことを持つばかり也」まで、ここでは、庵の周囲の四季折々の様子、庵での仏道修行の気ままさについて書かれている。

第六段落は、「方丈のすまみ楽しきこと此の如し」から最後

までであるが、先にも触れたように、広本系の末尾にあるような、庵での生活に対する懐疑や批判は書かれていない。なお、この最後の部分には広本系にはない、「墨ぞめのころもにたる心かたとふ人あらばいかゞこたへむ」という和歌が一首載せられている。

そして、奥書は次の通りである。

此本奥書曰

方丈記者是祇翁之所持以長明自筆卷物写之畢誠筐中之重

宝也

延徳二年三月上旬

肖柏判

さて、肖柏には、永正十三年（一五一六）成立の『三愛記』という随筆と、成立年末詳ながら永正期頃に成立したと考えられている随筆『夢庵記』がある。『三愛記』は、肖柏が七十四歳の時の作品で、花と香と酒への愛好を語る。ただし、この作品の成立事情としては、そもそもは常庵龍崇が永正十年に漢文で、肖柏のことを書いた『三愛記』があり、それをごく簡略にして和文で肖柏自身が書いたものである。たとえば、冒頭の部分を漢文と和文とそれぞれを掲げてみれば次のようになる。

往歳洛有一居士、不道其冠不備其履又不就仏求。⁴

此のごろ世にひとりの居士あり。儒釈道によらず。⁵⁾

常庵による漢文『三愛記』は、かなり長い作品で、花や酒を愛した人々のことが、中国の故事によって詳しく書かれている。肖柏の和文『三愛記』は、ごく簡略に自分の花・香・酒に対する好尚を書いている。この点に関して、島津忠夫が次のように述べている。

常庵の漢文の記が、実に一千字をこえる堂々たる長文の記であるのに対し、肖柏の和字記は、はるかに短い。しかし、独得の味をもつていて、単なる「和らげ」に終始してないということが出来る。⁶⁾

肖柏の『三愛記』は、自分自身の趣味を肯定的に満足感を持って書いている点が重要であろう。その肖柏が自分の庵について書いた作品が『夢庵記』である。この作品もごく短く、『群書類従』本で、四百字にも満たない。しかも前半は、「夢庵」という文字を中国の能書に書いてもらったことや、二首の和歌が書かれているので、庵についての記述は以下の部分だけである。

草庵のさま、四隣に長松花樹めぐりて、前庭に大なる巖

あり。臥龍のごとく猛虎に似たり。海辺の石あひまじはる。其中に紅梅軒に近きあり。あしやの里より、はるばるうつし来りて年をかさぬ。横斜三四丈にをよべり。かたはらに井あり。綆のながき事数尋。桐葉おほひて、暑を避くたよりあり。四時の花万木にたえず。是をもてあそびて晨夕老を忘る。よて書院を弄花軒と号す。⁷⁾

ここには、草庵の建物やその内部の描写は書かれていないが、草庵の周囲の庭のたたずまいが描かれ、樹木や庭石や井戸の様子がよくわかる。芦屋の里からわざわざ紅梅を移植したりしているのも、自分の理想の住居環境を作ろうとする意欲のあらわれであり、鴨長明の『方丈記』における庵の理想性と通じるところがある。

ただし、肖柏の場合は、『夢庵記』と『三愛記』を読む限り、世間に対する批判は書かれておらず、もっぱら自分の趣味に合った生活を、満足のゆく環境で過ごすことの楽しさが前面に出ている。このような肖柏の暮らしぶりについて木藤才蔵は、『三愛記』にみられる酒についての記述から、次のように述べている。

それにしても「酒はもろこし南蛮のあぢはひをこゝろみ」などという表現は、貿易港である堺の市民と深い交渉

のある者でなくては、思い及ばぬ表現である。恐らく肖柏は、摂津の豪族はもとより、堺の豪商その他の後援のもとに、風流でしかも華麗な日常生活を送っていたものと思われる。⁸⁾

「風流でしかも華麗な日常生活」が描かれている肖柏の『三愛記』と『夢庵記』は、草庵暮らしのイメージが、一般的には簡素で質素な生活を思い浮かべせるのに対して、独自の作品世界を形成していると言えよう。けれどもこのような芸術的な生活は、そもそも『方丈記』でも、琵琶や琴を奏でたり、周辺の歌枕の地を探訪したりする日常として描かれていたのであるから、『方丈記』のこのような風雅な側面を独立させて成立した作品が、肖柏の「住居記」であると考えられ、結果的に略本系『方丈記』の書き方と共通するのである。

三 大田南畝『山手閑居記』と『方丈記』

大田南畝は、寛延二年（一七四九）に牛込中御徒町に生まれ、文政六年（一八二三）に七十五歳で没した。ここでは、彼の描いた「住居記」を取り上げて、それがどのような住まいの文学と関連しているかについて考えてみたい。彼は、生まれてから五十代の半ばまでを牛込で過ごし、この住まいのありさま

については『山手閑居記』と『巴人亭記』などに書いている。その後、没するまでに二回転居している。すなわち、文化元年（一八〇四）、五十六歳の時、小石川金剛寺坂金杉に転居した。この住まいは、「遷喬楼」と名付けられ、ここでの花見や六十賀についての作品を残している。⁹⁾ なお、永井荷風「礫川徜徉記」には次のような記述がある。

文化のはじめより大田南畝の住みたりし鶯谷は金剛寺坂の中ほどより西へ入る低地なりとは考証家の言ふところなり。嘉永板の切絵図には金剛寺の裏手多福院に接する処明地の下を示して鶯谷とはしるしたり。¹⁰⁾

さらにその後、文化九年（一八一二）、六十四歳の時、駿河台淡路坂に転居した。この住まいは、「緇林楼」と名付けられた。

ここでは、牛込中御徒町に居住していた時代に書いた二つの住居記『山手閑居記』と『巴人亭記』を取り上げて、これらの作品が、文学史の中でどのような住まいの文学の系譜と関わっているか考えてみたい。

最初に、天明八年（一七八八）頃刊行された、狂文集『四方のあか』に収録されている『山手閑居記』を取り上げたい。『大田南畝全集』第一巻によって、まずその全文を掲げ、その

後に、この作品で使われている表現の典拠などについて考察することとする。

・『山手閑居記』

わが庵は松原とをく海ちかくと詠みけんむさし野の広小路にむすべる、芝のはてにもあらず、ちはや振る神田浅草のにぎやかならぬも、よしや足引の山の手になんすめりける。春は桃園の花に迷ふ外山の霞たゝぬ日もなく、夏は江戸川の螢をみる目白の滝の音たえず、秋は高田のかりがねに、民の貢の未進をあはれみ、冬は富士を根こぎにして、わが鉢の木の雪とながむ。四季折々の美景をいはゞ、番町の道の一筋ならず、大木戸の駒のひきもきらざるべし。古寺の藁やぶれて、昼無尽の講を催し、神の宮居も所せく、夜うかれめのふしどゝなれり。頭にをくしも屋敷もり、うきをみるめのうらがしやまで、たゞ何となくひなびたり。むべも富みける殿づくりりに、みつばよつばのつるをもとめ、よきゝぬきたる身のほども、いざしら壁のいちぐらをうらやむともがらは、此地の住居はなりがたからん歎。さはいへ、ひとへに深き山にかくれん坊をし、とをき海に沖釣をせんとにはあらず。吏にして吏ならず、隠にして隠ならず、朝野の間のがれんとならば、いづこか此やまの手にしかがらめやは。

窓のうちにはふじのねながらながむればたゞ山の手にとるところみれ

冒頭部分の、「わが庵は松原とをく海ちかくと詠みけんむさし野の」は、太田道灌の次の和歌に依っている。

わが庵は松原つづき海ちかく富士の高根を軒端にぞみる

この歌は、寛正五年（一四六四）に太田道灌が入洛した時、後土御門天皇の「武蔵野はどのような所か」という勅問に対して、

露置かぬ方もありけり夕立の空より広き武蔵野の原

と奉答したところ、重ねて、「ではその武蔵野の風景は」と勅問があったのに奉答した歌であるという。これに対して、後土御門天皇が、

武蔵野は苜蓿のみと聞きしかどかゝる言葉の花に咲くかな

という御製を賜ったという、一連のやりとりの故事が伝えられている^①。この故事には、京の文化的優越の時代にあつて、武蔵

野に居住する武将が巧みな和歌を詠んだことへの天皇の驚きと感動が示されている。この話は、江戸時代に人気があった故事のようで、『日本史伝川柳狂句』第十六冊には、このことを詠んだ多くの句が掲載されているが、その中から三句例示してみよう。

夕立の空より広く御答え

山吹の後は芙蓉が軒で咲キ

武蔵野の花と桔梗を御叡感

なお、太田道灌の「わが庵は」の歌は、初句が「わが宿は」という形でも伝承していたようで、太田道灌に仮託された随筆『我宿草』の「序意」の冒頭に次のように書かれている。

我宿は松原つゞき海見えて、富士を軒端に眺めやる言葉
のたねのつれづれに、ふりにしかたの世を求め、今の世に
較て、ひとりこれをなげき^⑫(下略)

この冒頭部の表現は、三十一文字の和歌の形そのまままで引用されておらず、原型が不明である。三句目も「海近く」ではなく「海見えて」となっている。しかし、この和歌が人口に膾炙していたであろうことはわかる。『我宿草』の「序意」の末尾

には次のように書かれている。

発端の、我宿は松原つゞき、と詠る和歌は、入道上落のとき、朝廷にて宿はいづこのほど、尋給へるときに、答奉られし歌なりと、野史に記したるより、世に言はせり。然れども家集には(慕景集と言ふ一冊近刻す)見えず。勿論それとたしかに証とすべきものも詳にせず。後の君子の鑿をまつのみ。

ここでも、太田道灌の故事について詳しい出典などは書かれておらず、詳細は不明であるが、この和歌が著名であったからこそ、『我宿草』の冒頭に引用されたのであり、ひいては、大田南畝も自分の「住居記」の冒頭に引用しているのである。また、『永享記』(『続群書類従』第二十輯上)には、太田道灌が、江戸城の櫓に登って周囲を眺めて、「我庵は松原遠く海近し富士の高根を軒端にぞ見る」と詠んだことが記されているが、天皇の勅問のことは書かれていない。

さて、後土御門天皇の和歌にも「武蔵野は苜蓿のみと聞きかど」とあるように、和歌における武蔵野は、茫漠たる野原として詠まれることが多い。たとえば、『新古今和歌集』所載の次の二首などに典型的にあらわれている。

武蔵野やゆけども秋の果てぞなきいかなる風かすゑに吹くらん
 (秋歌上・三七八・源通光)

ゆくすゑは空もひとつの武蔵野に草の原よりいづる月影

(秋歌上・四二二・藤原良経)

あるいはまた、次のような和歌もある。

武蔵野や草の庵もまばらにて衣手寒し秋の夕暮れ

(『如願法師集』・五二七)

都に住む歌人が観念としての歌枕である武蔵野を詠んだこれらの和歌は、広々とほしても寂しい叙景歌である。それに対して、太田道灌の「わが庵は松原つゞき海近く富士の高根を軒端にぞ見る」の歌は、武蔵野の住人が自分の住みかとしての武蔵野を詠んだ和歌であることが重要である。

太田道灌の歌には、武蔵野という地名自体は出てこないにもかかわらず、太田南畝が自分の「住居記」の冒頭を、太田道灌の著名な和歌を引用する表現で書き始めたのは、それが江戸城を開き、そこに静勝軒を設けて文人たちと交流した太田道灌の故事へのゆかしさとともに、江戸に住んでいる自負が大田南畝にあり、そのようなところから、この歌を使ったと考えられる。

なお付け加えれば、この太田道灌の歌は、田山花袋の著述にも次のように引用されている。

太田道灌は、武蔵野に聯関した最も縁故の多い武将だが、その館は初め品川の御殿山にあって、それから、今の阪下門あたりにその城砦らしいものを築いて、この附近に覇を唱えた。例の『わが庵は松原つゞき海近く富士の高根を軒端にぞ見る』という静勝軒は、その阪下門の城砦の中にあつたのである。(『武蔵野の背景』^①)

さて、太田南畝は、太田道灌の歌を引用しながら、それに続けて、「むさし野の広小路にむすべる、芝のはてにもあらず」と書いているが、ここには表現の工夫が見られる。先に挙げた武蔵野の和歌のイメージは、武蔵野の広さを象徴していたが、「むさし野の広小路」という言葉統きは、武蔵野の「広さ」と地名としての「広小路」を掛けているし、「芝のはてにもあらず」という表現も、地名としての「芝」に、武蔵野の野原に生える「芝草」の果てを掛けていると考えられる。しかも「はて」は、武蔵野の縁語と言ってもよいような言葉であり、和歌では武蔵野が広くて果てがない、と詠まれることをも踏まえた書き方になっていると言えよう。

書き出しの部分に続けて、「ちはや振る神田」や「足引きの

山の手」の部分には「神」や「山」に掛かる枕詞を使って書いているのにも工夫が見られる。そして「外山(春)」「江戸川と目白(夏)」「高田(秋)」と、自分の住まいである牛込周辺の地名を季節とともに列挙し、冬は富士の雪を描く。ここでも「夏は江戸川の螢をみる目白の滝の音たえず」という表現には、江戸川の螢と目白の滝という景物を挙げるだけでなく、「目」に「螢をみる目」と「目白」を掛けている。

そして「四季折々の美景をいはず」と言う表現には、『方丈記』の影響が見られる。江戸時代に読まれた『方丈記』は広本系の中でも流布本と呼ばれる系統の本で、ここには末尾近くに次のような記述がある。この部分は同じ広本系の中でも古本系には見られないものである。むろん、略本系にもない。

おほかた、世をのがれ、身を捨てしより、恨みもなく、恐れもなし。命は天運にまかせて、惜しまず、いとはず。身は浮雲にならずへて、頼まず、まだしとせず。一期の楽しみはうたたねの枕の上にはきはまり、生涯の望みはをりをりの美景に残れり。

なお、今引用した『方丈記』流布本系の表現の中で、「一期の楽しみは、うたたねの枕の上にはきはまり」の部分は、『山手閑居記』の最後に付された歌「窓のうちにふじのねながらなが

むればたゞ山の手にとるところみれ」とも響きあっているようにも思われる。

さて、『山手閑居記』の後半部は、牛込の鄙びた様子を面白く描く。荒れ果てた古寺や神社では、昼に無尽講が行われたり、夜はうかれめの宿となったりすると書き、「寺と社」、「昼と夜」を対にしながら書いている。また、「頭にをくしも屋敷もり」は、「頭に置く霜」と「下屋敷守」を掛詞で表現しており、「頭が白い霜のようになった白髪の年老いた下屋敷守」のことである。「うきをみるめのうらがしや」は、「憂きを見る目」と「海松布の浦」と「裏貸家」のことを、縁語・掛詞を駆使して表現している。

「むべも富みける殿づくりに、みつばよつばのつるをもとめ、よきゝぬきたる身のほども」の部分は、『古今和歌集』の仮名序を使って書いている。すなわち、仮名序にある「祝ひ歌」の例歌(催馬楽にもなっている)、「この殿はむべも富みけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり」の部分と、六歌仙の中の、「文屋康秀は詞たくみにてそのさま身におはず。いはばあき人のよききぬ着たらむがごとし」の部分によっている。しかも「むべも富みけり」の「むべ」には、『百人一首』で著名な文屋康秀の歌「吹くからに野辺の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ」も響いていよう。

おそらく大田南畝の脳裏には、自分の住まいのあたりが鄙び

ていることを書いてきたので、それと対比して富家のことを書こうとした時に、『古今和歌集』仮名序を連想して、「むべも富みける殿づくり」という表現が思い浮かび、その「むべ」からの連想で同じ仮名序に出てくる六歌仙評の中から文屋康秀のことも心に浮かび、「よき、ぬきたる身のほども」と言う表現が自然と紡ぎ出されてきたのであろう。『山手閑居記』のひとつひとつの細かな表現の基盤は、まず第一に彼の深い和歌の教養であることが示唆される。

この他にも「いざしら壁」には、「いざ知らず」と「白壁」を、「ひとへに深き山にかくれん坊をし」には、「山に隠れ」と「隠れん坊」を、それぞれ掛詞として使っている。

最後に付された歌「窓のうちにはふじのねながらながむればたゞ山の手にとるとこそみれ」も、「ふじのねながら」の部分に、「富士の嶺」と「寝ながら」を掛け、「山の手にとる」の部分に、「山の手」と「手に取る」を掛けている。しかもこの歌は先にも述べたように、流布本『方丈記』の「一期の楽しみは、うたたねの枕の上にはきはまり」とも対応して、わが住まいへの満足感を表明していると考えられる。

以上、『山手閑居記』の表現に即して、内容を辿ってみた。大田南畝はこの文章を書くにあたって、まず第一に表現の基盤としては和歌的な語彙・言葉統き・枕詞・掛詞などを駆使して、技巧的に、また滑稽味を持たせて書いているということが

わかった。

さらに、「住居記」ということで、おのずと『方丈記』の影響も見られた。すなわち、第一に、自分の住まいの周辺のありさまについて書いている点。第二に、その描写が四季折々の自然美と結び付いていること。第三に、流布本『方丈記』の表現が引用されていることなどである。

ところで、この『山手閑居記』は、大田南畝の牛込中御徒町在住時代の「住居記」である。南畝のこの住まいそのものは、父親の住まいでもあるわけで、大田南畝自身が理想の住まいを求めて土地を探し、理想の家として建てたものではない。したがって、流布本『方丈記』の表現や構想が『山手閑居記』に反映しているとは言え、理想の住まいを自分で建てた記録としての『方丈記』の一面は、この『山手閑居記』には見られない。

『山手閑居記』と『方丈記』の関連性についてここでまとめおくならば、現在自分が住んでいる住まいに対する満足感、つまり、この住まいが自分に相応のものであり、周囲の環境・風景も自分にとって好ましく、世間の富貴からは遠く離れた暮らしぶりであるが、それもまた楽しいという、「閑居の気味」を述べている点に、『方丈記』との強い共通性が感じられるのである。

四 大田南畝『巴人亭記』と『方丈記』

さて、大田南畝が、父親の代からの牛込中御徒町の住まいを増築したのは、彼が三十八歳の時、天明六年（一七八六）であった。この増築部分は「巴人亭」と名付けられた。天明七年（一七八七）十二月には『巴人亭記』を書いてゐる。以下、まずその全文を『大田南畝全集』第一巻によって示し、この文章の表現や構想、『方丈記』との関連性について、先に取り上げた『山手閑居記』と対比しながら考察してみたい。

・『巴人亭記』

かたつぶりのつのをちぢめてはいり、蟹の甲ににせて穴をほるも、家といふものゝなくてかなはねばにやあらん。かりこものみだれしこもうちかぶり、露霜の宿なしとも身をはふらかしすてざらんかざりは、膝をいるゝの窮屈ならんより、足のばすほどの家居なからんやと、あらたにひとつのやどりをしむ。もとより二尊堂にいまし、妻子室にみたり。そのゑんがはのはしつかたに、ひとつの妻戸をひらきていれば、ひろさわづかに十畳ばかり、こゝに四方のまらうどを迎ふ。維摩が方丈の玄関にて、八万四千の獅子を舞はせし類なるべし。その北に三枚敷あり。東面に戸をあ

けて、しやらくさきつくえを出せり。蛩こいこい雪こんこんの場所なるべし。すべて財乏しければ物ずきなし、床なければ違棚もみえず、かけ物は壁にかけ、柳は隣からのぞく。洪柿はあるにまかせ、草はところまだらにぬかしむ。土蔵の目の上の瘤となり、雪隠のはなのさきにわるくさきも、かの南のやのかき、東どりの下水をいとはざりし、司城子罕がむかしをしのび、望海の亭、見山のたかどの、きらきらしききはあらねど、張天錫が勸化をもて、家居をいとなみしたぐひに似たり。わが家にくるとしくる人、わが門に入るとしいる人、こゝにのみこゝにわらひ、こゝにうたひこゝにたのしむ。のむものは何ぞ四方のあからなり。うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり。もしそれ陽春の白雪糕も、また小児のたはぶれなり。いづれをか高しとしいづれをかひくしとせん。

この『巴人亭記』は、大田南畝がそれまでの住まいに、十畳の部屋とそれに続く三畳の書齋を増築したことを記す住居記である。『山手閑居記』と比べた場合の最大の違いは、『山手閑居記』には、自分の住まいの建物自体の具体的な描写が書かれていなかったのに対して、『巴人亭記』には住まいの具体的な描写が詳しいということである。この描写部分は、『方丈記』の庵の内部描写を彷彿させるものであり、その点がまず第一に

『方丈記』の強い影響力を感じさせる。

第二に、表現面では、『山手閑居記』が和歌との関連が強かったのに対して、『巴人亭記』では、中国の故事が多く使われていることが特徴となっている。第三に、三畳の書斎の記述には、菅原道真の『書斎記』と通じるところがある。第四に、『巴人亭記』では、独居の楽しみではなく、この住まいが家族や友人たちとの語らいの場所である点が、『方丈記』よりもむしろ菅原道真の『書斎記』や慶滋保胤の『池亭記』と通じている。

子 つまり、『巴人亭記』は短い作品であるにも関わらず、作品内部の重層性という点では、『書斎記』『池亭記』『方丈記』などと関わっているということである。

島 では、具体的に『巴人亭記』の表現と構想を見てゆこう。この作品は短編ではあるが、内容的には四節に分けられるだろう。第一節は、冒頭から「あらたにひとつのやどりをしむ」まで。ここでは、蝸牛や蟹の例を引きながら、家というものが人間にとって必要であることがまず説かれる。そして、定住の住まいもないほど落ちぶれていない限りは、窮屈な狭い家よりは、少しでもゆっくりとした家がほしいと思ひ、新たに増築したことを述べる。

第二節は、「もとより二尊堂にいまし」から「雪こんこんの場所なるべし」まで。ここには、増築部分が具体的に書かれ

る。まず、自宅には両親と妻子がいること、縁側の端の妻戸(14)（両開きの戸）の向こうに十畳の部屋、さらにその北側に三畳の部屋を増築したことを書く。十畳の部屋には客人が集い、三畳の部屋は洒落た机を置き、「蛩こいこい、雪こんこんの場所」とあるので、「蛩の光窓の雪」のたとえから、ここを書斎としたことがわかる。また、維摩の故事が書かれ、十畳の部屋に多数の客人が集った賑やかな様子もわかる。

第三節は、「すべて財乏しければ物ずきなし」から「家居をいとなみしたぐひに似たり」までで、この増築部分の内部と周囲についての描写である。部屋の内部は、床の間もないので違い棚もなく、書画などの掛け物は壁に掛けると述べる。このあたりの記述は、『方丈記』の庵の内部の記述を思わせる。流布本『方丈記』では、「阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかけ」、「西南に竹の吊棚を構へて」、書物を入れた皮籠を置いている。この他にも流布本『方丈記』には、法華経や「をり琴・つぎ琵琶」も置かれている。流布本『方丈記』では、このような庵の内部構造とそこに置かれている調度類の描写に引き続き、庵の周囲の様子(15)の描写に移るが、『巴人亭記』でも、室内描写に続いて、隣家の柳や庭の草木や土蔵・雪隠の描写があり、清貧な賢者の例が中国の故事から引かれる。

第四節は、「わが家にくるとしくる人」から最後までで、ここで、皆が「四方のあから」という大田南畝自身の別号とも

なっている酒を飲んだり、歌を歌ったりして楽しく集うことは、幼児が母乳の代わりに干菓子や「白雪糕」を食べて喜ぶことと変わりはないのだ、と述べて、「巴人亭」での日常の楽しさを強調している。

『巴人亭記』は、みずからの社交場としての部屋と書齋を増築したことを描き、そこがたとえ「財乏し」とも、自分の自由な空間としてのかけがえのない価値を有することを述べた作品である。二間のうち、南畝が力点を置いて書いているのは、客間としての十畳の方であり、三畳の書齋に関しては、そこでの執筆や読書や思索について具体的に書かれていない。それが菅原道真の『書齋記』との違いである。

以上、大田南畝の二編の住居記を見てきたが、彼の場合、幕臣であることと文学者であることのバランスを取りながら生きていたその生き方を反映するかのよう、住まいに対する満足感があらわされ、かつ、そこでの文学仲間との交友や小さな書齋を持ったことなどが描かれていた。今回取り上げた二編では、大田南畝は、広本系『方丈記』で鴨長明が書いたような世の中に対する強い批判や、天変地異については書いておらず、あくまでも自分の住まいに対する満足感や、増築した部屋の内部を描きつつ、自分に相応の住まいであることを表明している。

このことから、『山手閑居記』と『巴人亭記』は依拠した表

現としては広本系であるものの、文学精神という観点からはむしろ略本系『方丈記』の系譜に位置付けることができよう。ただし、この二つの作品も比較してみると、前者が自分の住まいの場所や周辺の景色を中心に書き、後者が建物を中心に書いているという違いもあった。

ところで、先に取り上げた牡丹花肖柏の二編『三愛記』『夢庵記』も自分の暮らし方への満足感と庵のたたずまいについて書いており、やはり略本系『方丈記』と共通する内容であった。なお、大田南畝は肖柏に対して次のような「賛」を書いている。南畝が肖柏に対して関心と共感を持っていたことがわかり、彼らの住まいに対する思いにもどこか通じるものがあることを示しているように思われる。これも『大田南畝全集』第一巻に収められている。

・『肖柏賛』

人に三愛の癖あり、牛に双角のあらそひなし。雲井の月の前には、玉しきの露ふかく、二十日草の花の下には、はた巻のひも長し。後中書王に後ある事をしり、種玉庵に種をのこすときく。その源きよく、その流れとをし。

おわりに

本稿では、室町時代の肖柏と江戸時代の大田南畝の二人の文
 学者を取り上げて、彼らが自分の住まいについて書いた作品を
 中心に、『方丈記』との関連を考察してみた。その際に『方丈
 記』の諸本を視野に収めて、これらのどの形の『方丈記』と最
 も関連が深いかという観点から述べた。それによって明らかにな
 ったことは、今回取り上げた肖柏と南畝の作品は、略本系
 『方丈記』の形式、つまり、自分の住まいでの日々の暮らしへ
 の満足感が描かれている作品であったということである。そし
 て、自分の庵を描くということは、外観やたてものの周囲の庭
 などのありさま、およびもう少し広い範囲での周辺の景色や環
 境などとともに関係することであり、住まいの内部を描くことでも
 あるということであった。

肖柏と南畝は、時代も人となりも社会的地位も経済事情も異
 なるが、みずからの好尚にしたがって住まいを作り、そこでの
 暮らしを楽しむという点では共通するところがあるのではない
 だろうか。それは、鴨長明の生き方でもある。ただし長明の場
 合は、特に広本系『方丈記』を読むと、「五大災厄」の描写な
 どに、強烈な社会批判が見られる。それに対して、肖柏や南畝
 の「住居記」にはそれらが見えないのはなぜだろうか。今後の

課題としたい。

本稿では触れられなかったが、広本系『方丈記』に見られた
 「五大災厄」の記述を受け継ぐような作品の系譜も辿ってみた
 い。「五大災厄」の記述は、たとえば心敬や芥川龍之介や吉井
 勇の作品などに影響を与えているからである。また、今回は取
 り上げられなかったが、『方丈記』の庵の描写の部分と直接に
 関わる近代の作品として戸川残花の『新方丈の室』があるし、
 アパート一間の独居生活を描きつつ、辛辣な社会批判も述べる
 作品としては森茉莉の『贅沢貧乏』などもある。これらの作品
 の考察を含めて、日本文学における『方丈記』の影響力につい
 ての研究を今後も続けてゆきたい。

『方丈記』は短編作品であるにもかかわらず、影響力という
 観点から見ると、いかに内容が豊富であるかということも、逆
 に照らし出されてくるように思われる。

(平成十三年十一月七日受理)

注

- (1) 『池亭記』および大福光寺本『方丈記』の本文の引用は、佐竹昭
 広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』(新日本古典文学大系・39
 岩波書店・一九八九年)による。
- (2) 「広本方丈記と略本方丈記」『国語と国文学』・昭和三十九年十
 二月号
- (3) 「方丈記本章部(後段)の論」『方丈記論』所収・笠間書院・一

九九四年)

- (4) 本文の引用は、島津忠夫解説・藤田秀雄訓点注解「松平文庫本三愛記」(『佐賀大学文学論集』昭和三十九年二月)による。
- (5) 『三愛記』の引用は、『群書類従』本による。
- (6) 注(4)論文。
- (7) 『夢庵記』の引用は、『群書類従』本による。
- (8) 「肖柏伝記小考」(『国語と国文学』・昭和四十六年七月号)
- (9) 『大田南畝全集』第十五卷所収の文化五年の「六十の賀」の記事など。
- (10) 岩波文庫『荷風随筆集』上に所収。
- (11) 『日本史伝川柳狂句』第十六冊(古典文庫・昭和五十三年)著者未詳。版本は、享和三年・弘化三年・嘉永三年のものがあ
- (12) り、享和三年版が『日本随筆大成』第三期9(吉川弘文館・昭和五十二年)に翻刻されている。
- (13) 『東京近郊 一日の行楽』(社会思想社・一九九一年)所収。
- (14) 浜田義一郎著『大田南畝』(人物叢書・吉川弘文館・昭和六十一年新装版)によれば、この時、父は七十二歳、母は六十四歳、妻三十三歳、長男定吉八歳、娘一人の六人家族である。一一七頁参照。
- (15) この増築によって生じた家族間のさまざまな軋轢については、平岩弓枝の小説『橋の上の霜』(新潮社・昭和五十九年)に詳しい。そこでは、母屋とこの増築部分を行き来する大田南畝が、「二つの家庭」を持って苦悩するさまが描かれている。

付記 本研究は、平成十三年度放送大学特別研究費による研究成果の一部である。

The Genealogy of Essay Literature

— from “Hōjō-ki” to “Hajintei-ki” —

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

This paper aims to survey the influence of “Hōjō-ki”. “Hōjō-ki” has great effect on essay literature.

The medieval poet Shōhaku wrote “San'ai-ki” and “Muan-ki”. He confessed his liking for flowers, fragrance and alcoholic drink in “San'ai-ki”. He sketched his hermitage embosomed in trees. Shōhaku was satisfied with his daily life.

Ōta Nanpo wrote “Yamate Kankyo-ki” and “Hajintei-ki”. He also confessed his satisfaction to his home in each essay.

The repercussions of “Hōjō-ki” are felt these essay literature.